

は、変異アレル0個の群 ($1.2 \pm 0.9\text{ng/ml}$) と比較して、有意に高い ($p < 0.05$) という結果が得られた。したがって PAR 血中濃度においては CYP2D6 遺伝子多型の関与が、特に低用量で大きいと考えられる。

11 統合失調症の分子遺伝研究

金子 尚史・村竹 辰之*・天金 秀樹**
辻 省次***・染矢 俊幸****
新潟大学大学院医学研究科精神医学
専攻
新潟大学医学部附属病院精神科*
国立療養所西新潟中央病院精神科**
東京大学大学院医学系研究科神経内
科***
新潟大学大学院医歯学総合研究科精
神医学分野****

当教室で行っている統合失調症の分子遺伝学的研究について報告した。関連研究では、疾患感受性候補遺伝子である BDNF 遺伝子、NOTCH4 遺伝子、5-HTT 遺伝子について同遺伝子内およびもしくはその近傍に位置する遺伝子多型を検討した。また、現在行っている連鎖研究についても報告した。

BDNF 遺伝子では患者一対照間で、5-HTT 遺伝子においては患者一対照間に加え発端者とその両親を用いた伝達不平衡テストにて検討したが、いずれも遺伝子多型の頻度に有意差は見られなかった。NOTCH4 遺伝子では、検討した5つのマーカーのうち、患者対照研究では (CTG) の繰り返し多型で、患者、両親のトリオによる伝達不平衡テストでは (TTAT) の繰り返し多型で有意差が見られたが、多重検定の修正後にはその差は有意とはならなかった。

現在、日本国内にて見出された統合失調症多発家族系を用いた連鎖研究を行っており、終了次第結果を報告する予定である。また、日本国内における罹患同胞対をもちいた多施設共同研究による連鎖研究にもサンプル収集および解析施設として参加している。

今後は、遺伝的異種性の克服、検出力、特異性の向上、大量データの迅速処理を目指し、研究手

法をさらに改善して研究を進めていきたい。

12 アルツハイマー型痴呆における視覚性事象関連電位とストループ・テストの比較

吉浜 淳・結城 麻奈・坂井 乃美
直井 孝二・松田ひろし・増田 幸枝*
伊藤健太郎*・飯森眞喜雄*
立川メディカルセンター柏崎厚生病院
精神科
東京医科大学精神医学教室*

【目的】

健常成人、健常老人及びアルツハイマー型痴呆 (DAT) 患者に対し、視覚性事象関連電位 (ERP) 検査とストループ・テストを施行し、その結果を比較・検討する。

【対象】

健常成人30名 (年齢 mean \pm SD 34.0 ± 10.7)、健常老人10名 (80.4 ± 7.4)、DAT 患者10名 (78.2 ± 5.3) を対象とした。なお被験者には検査について説明を行い、書面にて同意を得た。

【検査方法】

ERP

検査課題は標準的な視覚オッドボール課題を用いた。刺激は標的刺激 (20%) に赤、非標的刺激 (80%) に青、黄、緑の四角図形をランダムにディスプレイに呈示し、被験者は赤色の図形が呈示された場合に出来るだけ早くボタンを押す課題を課せられた。

ストループ・テスト

被験者は4種類 (赤、青、黄、緑) の漢字を読み上げ (W cards)、次に同じ4種類の色を名づけ (C cards)、さらに色と漢字が一致していない漢字の色を名づける (CW cards)。各課題50個の読み上げ時間と誤りの回数を測定した。

【結果】

ERP

1) 健常老人群、DAT 群共に健常成人群に比較して有意に潜時の延長、振幅の低下が認められた。

2) 健常老人群と DAT の比較では、N100 では有意な差は認められなかったが、P300 では、潜時